赤十字NEWS

June 2013 Vol.877 6
http://www.jrc.or.jp
赤十字150年

日本赤十字社

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 企画広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

ドキドキ！赤十字の仕事体験

お医者さんに看護師さん、救護班員や保育士にも――赤十字のいろいろな仕事を体験できるイベント「赤十字キッズタウン2013」が5月19日、秋田市内で開催されました。制服に着替えたちびっ子たちは表情もキリッと赤十字職員に大変身！ ドキドキの仕事体験だったけど、みんな上手にできたかな？

キッズタウン内の「赤十字病院」で看護師に挑戦する子どもたち（JR秋田駅前の秋田拠点センター アルヴェにて）

CONTENTS

TOPICS 2
赤十字創設150周年
全国赤十字大会開催
赤十字キッズタウン2013 in 秋田
赤十字のお仕事を体験
赤十字広報特使 藤原紀香さん
日経ソーシャルイニシアチブ大賞受賞

TOPICS 3
赤十字150年写真展
全国で巡回開催中
原発避難者の健康調査
原子力災害時の
救護活動マニュアル作成
常任理事会開催報告
第82回代議員会開催公告

SPECIAL 4 5
近代看護と赤十字思想
ナイチンゲールと赤十字

AREA NEWS 6 7
赤十字運動月間
心からの寄付に感謝！
昭憲皇太后基金募金総額報告
兵庫・大分・三重・神奈川
中国四川省地震救援金募集
プレゼント

WORLD 8
シリア
IFRC近衛会長 現地視察
中国
四川省地震
赤十字会議 in 広島
核兵器廃絶へ行動計画案策定

http://www.jrc-undougekkan.jp

http://www.jrc-akb48.jp/

クローズアップ ひと

歌手
森山良子さん

歌が癒やしと励ましになることを願って

東日本大震災が起きたのは、デビュー45周年コンサートツアー公演前日。公演は延期となりましたが、被災地のことを考えると、「こんなときに歌が何の役に立つんだ」という思いがずーっと胸を離れませんでした。しばらくして被災地で歌う機会が訪れます。「私の歌を聞いて、普段は流せない涙を初めて流したとか、気持ちが少し晴れたよとおっしゃってくださる方々がいました。音楽には、ひと時だけでもつらさを忘れたり、気持ちを新たにしてもらえる力があるのかなと思いました」

5月8日に開かれた全国赤十字大会で、デビュー曲の「この広い野原いっぱい」など13曲を熱唱。澄み切った歌声が全国から訪れた参加者を魅了しました。

若いころに亡くなった兄への思いをのせた「涙そうそう」もその一曲。震災以降、この歌への共感が広がっています。「私にも経験がありますが、大切な人を失った悲しみは何十年たっても消えません。親しい人を亡くされた方々の気持ちを考えながら、少しでも皆さんの癒やしや励ましになるといいなと願いながら歌っています」

PROFILE

1948年、東京生まれ。67年、自ら作曲した「この広い野原いっぱい」でデビュー。「今日の日はさようなら」「禁じられた恋」「さとうきび畑」など数々の名曲を歌い続けている。小児がんと闘う子どもや家族を支援するチャリティーコンサートにも毎年出演。「さくら」で知られる歌手、森山直太朗さんは長男。

赤十字創設150周年

平成25年全国赤十字大会「原点に立ち返り進もう」

日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下、同名誉副総裁の秋篠宮妃殿下、常陸宮妃殿下ご臨席の下、平成25年全国赤十字大会が5月8日、東京・渋谷の明治神宮会館で開催され、赤十字社員やボランティアの代表など約1600人が全国から集いました。

大会は、赤十字事業の発展に尽くした功労者へ有功章などを贈る場として、毎年5月の赤十字運動月間に開催されています。今年は全国で個人49人、法人（団体）108社が金色・銀色有功章に選ばれ、東京都の豊泉百代さんら代表13人に皇后陛下から授与されました。

赤十字の将来はボランティアに

大会であいさつをした近衛忠輝社長は、東日本大震災での救護・支援活動に触れながら「救護から復興、復興から開発の流れを後押しする赤十字を草の根で支えているのがボランティア」と指摘。「ボランティアの力を引き出せるかどうかに赤十字の将来はかかっています」と参加者へ奮闘を呼びかけました。

また、赤十字国際委員会（ICRC）創設150年の節目を迎えたことを紹介した近衛社長は、シリアの国内紛争で同国赤新月社に20人もの殉職者が出ていることに危機感を表明。「赤十字や赤新月のマークが尊重されない現実から目を背けることなく、赤十字の原点に立ち返り、進むべき道を探し続けなければなりません」と訴えました。

代表13人には皇后陛下から有功章が直接手渡されました

名誉副総裁の秋篠宮妃殿下（左）、常陸宮妃殿下

大会第2部は森山良子さんのコンサート。「この広い野原いっぱい」「さとうきび畑」などのヒット曲に大きな拍手が送られました

有功章受章者代表

豊泉 百代（東京都）
高橋 トモ子（秋田県）
黒澤 洋介（山形県）
永嶋 文雄（埼玉県）
保美 たか子（千葉県）
宮坂醸造株式会社（長野県）
トヨタカローラ三重株式会社（三重県）
矢山 和宏（京都府）
牛尾 儁子（兵庫県）
小松 節子（広島県）
株式会社西京銀行（山口県）
木下 幸子（福岡県）
大嶌 秀昭（佐賀県）

社長表彰受章者

株式会社ホテルオークラ東京
京都青年赤十字奉仕団

（敬称略）

実践活動の報告

赤十字ボランティアで感じた誇り

岩手県イーハトーブ学生赤十字奉仕団前委員長
千葉 のり子さん

東日本大震災の被災地の子どもたちを北海道に招待したサマーキャンプ。私たちは被災3県の青年赤十字奉仕団で合同委員会を結成し、全国のメンバーにボランティア参加を呼びかけました。

キャンプで子どもたちは、うどん作りやジャガイモ掘り、乗馬などを体験。フィールドワークでは、東日本大震災に救援金を寄せた国や地域の名前と国旗をチェックポイントで集めました。子どもが「赤十字ってすごいんだな」と話してくれた時、素敵な企画であることをあらためて実感しました。

退村式で一番心に残ったのは、福島の男の子の「何も気にしないで外で遊べてよかった」という言葉です。「外で遊ぶこともできなかったんだ」とあらためて考えさせられました。

この活動に参加したことで、私たちもたくさんのことを学びました。赤十字マークをつけて活動できたことを誇りに思うと同時に、ひょっとしたら子どもたちの憧れの存在になれたのかもと思うと、自信にもなり、これからの活動への励みにもなりました。

国際交流で学んだ尊厳

大阪府高等学校青少年赤十字メンバー連絡協議会前会長
山下 美咲さん

海外の友達が欲しい。私はこのような理由から青少年赤十字・JRC部に入部。高校2年生の時に大阪府の高等学校青少年赤十字メンバー連絡協議会の会長となりました。

海外の青少年赤十字メンバーを招いた国際交流集会への参加や、大阪府JRC代表としての海外訪問などを通じて、文化を学ぶことは、お互いを理解し、尊重することだと気づきました。そして昨年秋の国際交流集会では、アジア・太平洋地域の41人のメンバーとともに「人間の尊厳」について考えたのです。

銃を構える少年ややせ細った子どもたち――。「これらの写真を見てあなたは何を感じますか」と講師から問われ、私には関係ないと思っていた自分に気づかされました。そして、どうすれば良い方向に変えていけるのかを話し合ったのです。

私は大学生になりましたが、人間のいのちと健康、尊厳が守られる世界を実現するため、これからも、赤十字の運動に関わり続けていきたいと考えています。

赤十字広報特使 藤原紀香さん

「日経ソーシャルイニシアチブ大賞」特別賞受賞

赤十字広報特使を務める女優の藤原紀香さんが、日本経済新聞社主催の「第1回日経ソーシャルイニシアチブ大賞」特別賞を受賞。5月23日に行われた表彰式で「この素晴らしい賞を頂けたのは、共に活動させていただいたNPOや赤十字の皆さま、これまでサポートしてくれた仲間やファンの方々のおかげです。これからも自分にできることを考え、伝え続けていきたい」と抱負を語りました。

同賞は、環境保護や貧困問題などの社会的課題を解決する「ソーシャルビジネス」に取り組む団体を表彰するもの。藤原さんが受賞した特別賞は、NPOや国際機関などが実施している事業の広報活動に貢献した著名人らに贈られるものです。

藤原さんは2007年に日本赤十字社の広報特使に就任。日赤の各事業の視察・取材をはじめ、東日本大震災では7回にわたり被災地を訪問し、支援活動に取り組んでいます。今月も赤十字奉仕団との活動で被災地を訪れる予定です。

赤十字キッズタウン2013in秋田

ちびっ子160人が集結 赤十字のお仕事を丸ごと体験

「災害発生！　救護班は出動してください」。日赤職員の号令で災害現場へ駆けつける赤い救護服姿のちびっ子たち。医師に扮して診察したり、保育士の先生にも変身――。秋田県支部は5月19日、「赤十字キッズタウン」を秋田市内で開催。160人の子どもたちが赤十字のいろいろな仕事を体験しました。

一番人気は災害救護のお仕事。無線でけが人の様子を聞くちびっ子隊員

キッズタウンは昨年に続いて2回目の開催。県内の全赤十字施設が運営に参加しているのが特徴です。

会場内には、病院、看護大学、乳児院、血液センター、県支部（災害救護体験）、ライフセービング体験の6つの職場（ブース）を設置。子どもたちは、ブースごとに制服に着替えて、各施設職員らの指導の下、それぞれの仕事に挑戦しました。

若い親世代に向けたアピールも

「お名前は？」「痛いところはありますか」。病院では子ども同士で診察体験。聴診器を使って心臓の音も聞きました。指導を担当した秋田赤十字病院研修医の平川威夫さんは「みんなが緊張しないよう心がけました」と汗を拭います。子どもたちからは「またやってみたい」と元気な感想が出されました。

ライフセービング体験では、レスキューボートのこぎ方や浮輪などを使った救助に挑戦。水上安全法指導員の池田恵子さんは「楽しく興味を持ってもらい、人を助ける知識も覚えてくれればうれしいですね」と語ります。

小学4年生の縄野颯良（そら）くんは「ライフセービングは、人助けの仕事だと思いました。僕もそうなれるよう頑張りたい」とハキハキ答えてくれました。

子どもたちの仕事体験を通じて、若い親世代に赤十字事業を知ってもらうのもキッズタウンの大きな目的です。

保護者からは「ライフセービングに日赤が関わっているとは知りませんでした」「いろいろなところでいのちを支えているんですね」といった声が多く聞かれました。

写真で知る

「赤十字150年写真展」全国で巡回開催中

人道を支え続けた一世紀半

難民キャンプで支援を展開する赤十字の医療班や災害現場で活動する日赤の救護班員――人道が危機に瀕（ひん）する現場に赴き、苦しむ人々へ寄り添い続ける赤十字の活動を紹介した「赤十字150年写真展」が全国の主要都市で巡回開催中です。

今年は、赤十字国際委員会（ICRC）の前身、五人委員会が赤十字忠想の提唱者アンリー・デュナンらにより創設されてから150年。写真展はそれを記念し、日赤とICRC駐日事務所が企画しました。

紛争下、捕虜への人道的な取り扱いを求めて収容所を訪れるICRC職員の姿や赤十字の支援を通じて家族との再会を果たした少女。戦争という極限状況の中、赤十字が人道を守るために果たしている役割を写真は浮き彫りにしています。

日赤が初めて災害救護を行った磐梯山噴火（明治21年）での活動、関東大震災（大正12年）の際に港区・芝公園に出された救護テント、被爆直後の広島赤十字病院（昭和20年）、日本赤十字社東京血液銀行の開設時の様子（昭和27年）など戦前戦後の日赤の歩みを知ることもできます。

交通事故増加を受け、東京に配備された日赤救護車両（大正期）

ベトナムの結合双生児ベトちゃんドクちゃんの治療は日赤が支援（昭和61年）

写真展は、世界赤十字デーの5月8日、東京都中央区の千疋屋ギャラリーでスタート（同月末で終了）

写真展 巡回開催の日程

- ◆山口県立山口博物館（山口県山口市）――開催中～6月9日
- ◆NHK名古屋放送局（愛知県名古屋市）――6月13日～19日
- ◆AER アトリウム（宮城県仙台市）――7月13日～22日
- ◆いわて県民情報交流センター（岩手県盛岡市）―7月26日～28日
- ◆関西国際空港（大阪府泉佐野市）――8月20日～9月6日（予定）
- ◆熊本日日新聞社新聞博物館（熊本県熊本市）－9月10日～10月10日

原発避難者の健康調査

継続的な健康支援活動の必要性

福島第一原発の事故により避難生活を送る被災者への生活支援として、日本赤十字社はいわき市に暮らす浪江町民を対象とした健康調査を実施しています。今回の活動を進める中で、多くの町民が生活環境の変化に伴うストレスにさらされ、血圧上昇や睡眠障害といった健康問題を抱えていることが見えてきました。

健康調査の合間には、悩みごとなどの聞き取り。なにげない会話が「こころのケア」になることも

健康調査は浪江町からの依頼を受け、昨年10月から開始されました。赤十字病院の看護師と日赤看護大学の看護教員がペアを組み、被災世帯を訪問。健康問題の把握に努めるとともに、こころのケアなどの支援を実施しています。

いわき市に避難している浪江町民1044世帯のうち、今年3月31日までに248世帯を訪問。電話による聞き取りを含めて649世帯の調査を終えました。

将来不安が影響 中長期的な支援を

いわき市内に避難している浪江町民の多くは、借り上げアパートなどで生活。町民同士で集う機会は少なく、コミュニティー形成の困難さが指摘されてきました。

家族が離れて生活しているケースも多く、周囲に安心して話せる相手がいない被災者も少なくありません。育児の孤立化や不登校など子育て・教育上の悩みも聞かれます。生活環境の変化によって運動量が減り、体重増加、血圧上昇といった問題を抱える人や、ストレスによる「抑うつ傾向」「睡眠障害」なども目立つようになっており、今後の継続的な支援が求められています。日赤は、今年9月まで健康支援活動を実施していきます。

原子力災害時の救護活動マニュアル作成

福島第一原発事故の対応踏まえ 緊急被ばく医療アドバイザーを配置

日本赤十字社は将来の原子力災害に備え、救護班の活動指針や行動基準などを定めた「原子力災害における救護活動マニュアル」をこのほど作成。今後、救護班要員に対して放射線環境下での安全対策教育を実施していくことなどを決めました。

日赤はこれまで、原子力災害時の救護活動を想定しておらず、安全基準や必要な資機材の準備ができていませんでした。そのため福島第一原発事故では、日赤救護班がいったんは撤退を余儀なくされるなど、十分な救護活動を展開できなかった面があります。今回のマニュアルはこの時の反省を踏まえて作成されたものです。

マニュアルは活動指針として、救護活動の実施地域を政府などが一般の立ち入りを制限する「警戒区域」以外に定め、活動中の累積被ばく線量を「1ミリシーベルトを超えない範囲」※に制限しました。

救護班には可能な限り診療放射線技師を加えることや、救護班要員に個人線量計や防護服セット、安定ヨウ素剤を携行させるなどの行動基準を定めています。

また、放射線環境下での救護活動を安全適切に行うため、医師と診療放射線技師からなる「緊急被ばく医療アドバイザー」を被災地支部および本社の災害対策本部に配置していくことを決定。あらかじめ同アドバイザーを任命し、救護班要員を対象に安全対策の教育・研修などを実施していきます。

このほか、原子力災害発生時には、地方公共団体から「緊急被ばく医療機関」に指定されている原子力発電所近隣の赤十字病院や、原爆症治療の知見に富んだ広島赤十字・原爆病院と長崎原爆病院、福島第一原発での経験を持つ福島赤十字病院の計10施設（3月末時点）が、国・地方公共団体からの要請に基づき、緊急被ばく医療活動を実施していくこととしています。

※日本における自然放射線被ばく量は年間平均1・48ミリシーベルト（原子力安全協会）

福島第一原発事故による周辺住民の一時帰宅をサポートする救護班（2011年5月撮影）

常任理事会開催報告

平成25年5月17日、本社において平成25年度第2回の常任理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

記

1 予算の補正について（高松赤十字病院の医療機器購入にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正）

2 理事会に付議する事項について（石巻赤十字病院の増改築工事にかかる資金の借入、小川赤十字病院の増改築工事にかかる資金の借入、鳥取赤十字病院の増改築工事にかかる資金の借入）

審議の結果、予算の補正については原案のとおり議決され、理事会に付議する事項については、原案のとおり本年6月21日開催の理事会に付議することが了承されました。

また、日本赤十字社の国際活動の取り組みについて報告しました。

第82回代議員会開催公告

平成25年6月21日（金）、午後1時から新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」（東京都千代田区霞が関3丁目3番2号）において第82回代議員会を開催し、左記の事項を付議いたします。

平成25年6月1日

記

第1号議案　役員の選出について

第2号議案　平成24年度事業報告及び収支決算の承認について

先駆者たち ～The History～

ナイチンゲールと赤十字

戦時救護活動が生んだ近代看護と赤十字思想

近代看護教育の生みの親といわれるフローレンス・ナイチンゲールを「赤十字創始者」と勘違いする人は少なくありません。しかし、赤十字創設に関わった事実はなく、当初は赤十字の考え方にも懐疑的でした。その一方、赤十字国際委員会（ICRC）は、功績のあった看護師に対して「フローレンス・ナイチンゲール記章」を隔年で授与。彼女への賛辞を世界に示しています。ナイチンゲールと赤十字。両者をめぐる歴史をひもといてみました。

ナイチンゲール（1820～1910）
英看護婦。修道女による宗教活動に密接に絡んでいた看護の仕事を職業として確立させることに尽力。1860年に看護学校を設立し、看護婦育成に力を注ぎました。生涯に150冊以上の著作を出版。看護だけでなく保健・衛生分野の発展にも大きく貢献しました
日本赤十字看護大学史料室　所蔵

150年を超えて現代に生きる看護哲学

フローレンス・ナイチンゲールの果たしたこと

『病院覚え書』（左）と、『看護覚え書』。『看護覚え書』は大正2（1913）年、『看護の栞』と題して全文を日赤が国内で初めて出版
日本赤十字看護大学史料室　所蔵

日本赤十字看護大学
川嶋みどり客員教授

日本赤十字看護大学
川原由佳里准教授

日赤看護大学の看護歴史研究室メンバーでもある2人。「日本では『自己犠牲を伴う献身』の象徴としてナイチンゲールが伝わりましたが、本当の彼女の考え方は正反対。自己犠牲を強く否定していました」と川嶋さん

「クリミアの天使」誕生

汚れ放題で悪臭が立ち込める病室にはネズミが走り回り、薬や食料、水も不足――クリミア戦争（1854～56年）で英陸軍のスクタリ野戦病院に派遣されたナイチンゲールが遭遇した惨状はこう伝えられています。

物資不足の原因が軍内部の無責任体制にあると考えた彼女は、身をていして軍官僚に立ち向かうとともに、掃除や洗濯、食事など病院環境の改善にも取り組みました。

「クリミアの天使」と呼ばれたナイチンゲールの行動は英国内はもちろん各国でも高く評価。アンリー・デュナン教育研究所所長だったピエール・ボワシエ氏は「赤十字思想の提唱者デュナンも）ナイチンゲールをこの上なく尊敬していた」と指摘しています。

院内感染が招いた死者拡大

近年の研究では、スクタリにおける死亡率の異常な高さを追究したナイチンゲールが、その原因を自らの無知にあったことを突き止め、その事実を公開しようとしていた、との説も出されています。彼女は当初、官僚の非情や無能さによる物資不足が多くの死の原因と信じていました。ところが帰国後に統計学者とともに調査した結果、原因は別にあることが分かったというのです。

平成16（2004）年にナイチンゲール記章を受章した日本赤十字看護大学客員教授の川嶋みどりさんは「傷病兵を狭い空間に詰め込み過ぎたことによる衛生環境の悪化と、こうした問題に対する彼女と部下の無知が多くの死を招いた、というのが調査の結論でした。この事実を公開しようと彼女は政府の隠蔽工作とも闘ったのです」と指摘します。

スクタリでの経験を糧に近代的な看護を確立

衛生に関する自分の無知が、多くの兵士を死に追いやってしまった――ナイチンゲールの後半生は、この教訓をどう活かしていくのかに費やされました。

1858年には『病院覚え書』を出版。スクタリの経験を「ひとつ屋根の下に多数の病人が密集していること」の危険性を示す実例として取り上げ、「ベッド一つ当たりの空間」「換気」「日光」の重要性などを訴えました。その翌年に発表した『看護覚え書』では、「すべての病気はその経過のどの時期をとっても、程度の差こそあれその性質は回復過程である」とし、患者の自然治癒力を発揮させることを看護の本質と訴えました。

こうしたナイチンゲールの看護論について川嶋さんは「ほとんどすべて現代に通用するもの。現代の私たちが学ぶべきものが詰まっています」と評価しています。

明治期の広報資料「赤十字幻燈」にも登場
後の日赤社長・石黒忠悳（いしぐろただのり）陸軍軍医総監が明治23（1890）年に考案した赤十字幻燈（現代でいう宣伝用スライド）には、ナイチンゲールがいの一番に紹介されています

「戦傷病者の救護は赤十字の下に」

反対ののち理解者へと変わったナイチンゲール

デュナンが送った一冊の本

イタリア独立戦争で最大の激戦となった「ソルフェリーノの戦い」（1859年）の凄惨な戦場に遭遇し、救護活動を実践したアンリー・デュナンは、この時の体験を『ソルフェリーノの思い出』としてまとめ1862年に出版。救護のボランティア組織を平時から準備しておき、その活動を国際条約で保障することなどを提唱しました。

実は、この本の中でデュナンは、クリミア戦争でのナイチンゲールの功績を紹介。完成した本の一冊をナイチンゲールに送っています。

「責任は軍が」と赤十字に反対

『ソルフェリーノの思い出』は各国で大きな反響を呼び、1863年には後のICRCとなる五人委員会が創設されます。

その一方、赤十字という国際的な運動に対するナイチンゲールは、理想を訴えるだけでは変わらない、自国の傷病兵を救う義務はあくまで各国政府にあると考えたからです。

川嶋さんは「看護をプロの職業として確立しようとしていたナイチンゲールにとって、ボランタリーによる看護という発想は受け入れ難かったはずです」と推測します。

手法違っても共通した思い

しかしその後、ナイチンゲールは赤十字の考えに理解を示すように。日赤看護大学准教授の川原由佳里さんは、1870年にプロイセン（ドイツ）とフランスとの間で起きた普仏戦争での彼女の活動と発言を例として注目します。

「ナイチンゲールは看護婦を派遣し、医療衛生に関する助言をして、プロイセンとフランスの両軍の戦傷病者を支援していましたが、あるとき新聞に〝ナイチンゲールがプロイセンを支持〟という批判的な記事が掲載されます。その際、彼女は〝私たちの関心は国籍ではなく戦傷病者。この活動は赤十字の下に位置づけられなければなりません〟と反論しているんですね」

英軍の医療衛生の改革に力を注いだナイチンゲールと、民間組織による国際的な救護を考えたデュナン。川原さんは「戦傷病者を救うために2人が選んだ手法は異なりますが、敵味方の区別なく傷ついた人を救いたいという思いは共通していたのではないでしょうか」と思いを馳せます。

アンリー・デュナン（1828～1910）
1872年にロンドンを訪れたデュナンは「私は赤十字の創始者、ジュネーブ条約の発案者として知られていますが、この条約に対するすべての名誉は一人の英国人女性に捧げられるべきです」とナイチンゲールに感謝する記事を書いています

第1回に萩原タケら3人が受章して以来、日本人の受章者は105人（平成25年時点）

ナイチンゲール記章

今年は2人の日本人が受章

平時または戦時に傷病者や障がい者などに対し献身的な看護活動を行ったり、公衆衛生と看護教育の分野に貢献があった看護師などを対象に贈られるナイチンゲール記章。ナイチンゲールの活動に対する賞賛のメッセージが贈られた1907年の赤十字国際会議（ロンドン）で、ハンガリー赤十字社が「看護活動において顕著な働きをした女性に与える国際的な記念の記章のため、ナイチンゲール資金の創設を」と提起。1912年の同会議（ワシントン）で基金と記章の創設が決定し、ナイチンゲール生誕100年の1920年に第1回が贈られました。

選考は隔年でICRCのナイチンゲール記章選考委員会がナイチンゲール誕生日の5月12日に発表しています。記章の授与は、各国において国家元首や各国赤十字・赤新月社の中央組織の長が行うものと定められており、日本では日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下から直接受章者に贈られます。今年は16カ国32人が受章。日本からは国際医療福祉大学大学院副大学院長の久常節子さんと石巻赤十字病院副院長兼看護部長の金愛子さんの2人が選ばれました。

久常節子（ひさつねせつこ）さん
国際医療福祉大学大学院副大学院長

厚生省医政局看護課長として阪神・淡路大震災で「こころのケア」を支援。東日本大震災では日本看護協会会長として救護・支援活動に取り組む。20年にわたり看護教育に携わりその発展にも貢献。

金愛子（きんあいこ）さん
石巻赤十字病院副院長兼看護部長

石巻赤十字病院、石巻赤十字看護専門学校に約36年間勤務。病院の災害対策や救護訓練に尽力。東日本大震災では夫を亡くし自宅も失うが、病院を離れることなく職務を全うする。

ナイチンゲールの生涯	（年）	赤十字に関連する出来事
5月12日、イギリス人夫婦の間に生まれる	1820	
	28	赤十字思想の提唱者アンリー・デュナン生まれる
家族の反対によりソールスベリイ病院での看護婦訓練を受けることを断念	45	
カイザースヴェルト看護学校に2週間滞在	50	
再度カイザースヴェルト看護学校で訓練を3カ月間にわたり受ける	51	
淑女病院の監督職の仕事を得る	53	
クリミア戦争勃発。ナイチンゲールは38人の看護婦を率いて、トルコのスクタリ病院へ	54	
ロンドンでナイチンゲール基金創設	55	
クリミア戦争終結。ナイチンゲールもイギリスへ帰国。陸軍の衛生状態の改善について上申	56	
『病院覚え書』出版	58	
『看護覚え書』出版	59	イタリア独立戦争での「ソルフェリーノの戦い」にデュナンが遭遇。敵味方の区別なく救護活動に奔走
ナイチンゲール看護婦訓練学校を開設	60	
	62	デュナンが「ソルフェリーノの思い出」を出版。ヨーロッパ各国で大きな話題に
『インドにおける陸軍の衛生』出版	63	赤十字国際委員会（ICRC）の前身となる五人委員会発足。赤十字標章などを定めた赤十字規約を採択
	64	12カ国が「ジュネーブ条約（赤十字条約）」にサイン。国際赤十字組織が正式に誕生
『救貧院病院における看護』出版	67	
『産院覚え書』出版	71	
	77	西南戦争始まる。佐野常民らにより「博愛社」が設立される
赤十字勲章を受ける	83	
	86	日本がジュネーブ条約に加入
	87	博愛社が日本赤十字社に改称、国際赤十字に加盟
	90	日本赤十字社病院で看護婦養成事業を開始
農村へ衛生普及活動を広げるため保健指導員の運動を始める	92	
『町や村での健康教育――農村の衛生』を出版	94	
	1901	第1回ノーベル平和賞をデュナンが受賞
ロンドンで開かれた第8回赤十字国際会議で祝賀を受ける	07	赤十字国際会議でナイチンゲール記章の創設が提起される
ナイチンゲール没	10	アンリー・デュナン没
	12	第9回赤十字国際会議（ワシントン）でフローレンス・ナイチンゲール基金と同記章の創設を採択
	20	第1回ナイチンゲール記章を世界の52人に。日本からは萩原タケ、山本ヤヲ、湯浅うめの3人が受章

赤十字運動月間（5月1～31日）

全国でPRイベント開催 人道支援の取り組みをアピール

PR Event

県支部のパレードタイトルは「あなたのまわりに赤十字」

広島県

フラワーフェスティバルに赤十字コーナー

「心に花を　咲かせる笑顔　平和な未来」をテーマに5月3日から5日まで開催された「ひろしまフラワーフェスティバル」。広島県支部はメーン会場となった平和公園内の赤十字ひろばで、事業紹介パネルや災害支援物資の展示、AED（自動体外式除細動器）のミニ講習会などを実施しました。平和大通りで行われたパレードには、赤十字奉仕団や青少年赤十字（JRC）のメンバーら約180人が参加し、来場者に赤十字への理解と協力を訴えました。

くまモンから園児に赤十字くまモン・キティピンバッジをプレゼント
※ピンバッジは熊本県支部（096-384-2120）で販売中

熊本県

くまモンも赤十字にエール！

熊本県支部は、赤十字運動月間の開幕を告げる「オープニングセレモニー」を5月1日、熊本赤十字会館で開催。職員やボランティア、青少年赤十字（JRC）加盟園のさくら幼稚園の園児など約70人が参加しました。セレモニーでは、川口弘幸事務局長が「県民一人ひとりに赤十字への理解をお願いしたい」とあいさつ。県のPRキャラクター「くまモン」も駆けつけ、園児とともに赤十字活動にエールを送りました。

世界の赤十字をつなぐウォーキングイベント

世界赤十字デーの5月8日、世界35の国と地域の赤十字・赤新月社がランニングやウォーキングをリレーしていく「150周年記念ランニング」が行われました。日本では「ウォーキング・イン・表参道」が企画され、ヴィンセント・ニコ代表をはじめとする赤十字国際委員会（ICRC）駐日事務所のメンバーと日赤本社職員の35人が東京・港区の日赤本社から渋谷区の表参道ヒルズまで歩き、赤十字をアピールしました。

赤十字マークを掲げながら歩き、街行く人にPR

埼玉県

「写真を撮ってください」と子どもにも大人気

アンリー・デュナンの“ゆるキャラ”登場

埼玉県支部は5月1日、JR浦和駅構内で赤十字運動月間のPRイベントを行い、赤十字活動を支える社員参加への協力を呼びかけました。イベントには、赤十字思想の生みの親アンリー・デュナン（1828～1910年）をゆるーくデザインした埼玉県支部キャラクターの「デュナン君」も登場。多くの人が足を止め、デュナン君との握手を求めていました。

鹿児島県

「医師や看護師になるのが子どもの夢。その夢に一歩近づけました」と喜ぶ父母も

マンモスフリマに初出展！

5月の運動月間を前に赤十字をもっと身近に感じてもらおうと、鹿児島県支部は4月27、28日、鹿児島本港区北ふ頭芝生公園で行われた「かごしまマンモスフリマ2013春」に赤十字体験ブースを初めて出展。救急法のミニ講習や災害時の救護所体験、展示コーナー、子ども用の救護服・ナース服を着用しての写真撮影コーナーなどを実施。ブースには2日間で840人を超える参加者が訪れました。

岡山県

巨大赤十字マークは新幹線からもハッキリ!

街を照らした巨大赤十字マーク

岡山県支部は5月1日から31日まで、JR岡山駅前のビルに40メートル四方の赤十字マークを点灯させました。「赤十字思想誕生150周年記念キャンペーン」の一環として平成21年にスタートさせたイベントで、5回目となる今年が最終年。平成23年以降は震災復興のシンボル、被災地へのエールとして、また震災犠牲者へ鎮魂としての願いも込めて行われました。

昭憲皇太后基金特別増額募金に3億8500万円

「昭憲皇太后基金」の創設100周年を記念した特別増額募金（平成24年1月1日～平成25年4月11日）に際して、天皇皇后両陛下からのご下賜金のほか、多くの国民の皆さまから多額の寄付が寄せられ、募金総額は3億8500万円に達しました。

皆さまのご協力に心より感謝申しあげます

心からの寄付に感謝！

献血活動30周年記念の献血広報車　長崎県

献血活動30周年を迎えた株式会社森開発から3月27日、長崎県支部に献血広報車が寄贈されました。同社は昭和59年に献血活動を開始。年2回の献血で、献血者数は延べ9400人に達します。贈呈式で森強社長は「協力してくださった皆さまのおかげです。今後もできることをやっていきます」とあいさつ。関根一郎長崎血液センター所長が「30年間で何人ものいのちが救われました」と謝辞を述べました。

大規模災害に備え通信指令車　神奈川県

3月28日、神奈川県遊技場協同組合・神奈川福祉事業協会から神奈川県支部に指令車が寄贈されました。車両には衛星携帯電話や業務用無線機などの通信機器が搭載され、予想される大規模災害などでの活躍が期待されます。同組合・協会からは献血運搬車の支援を平成7年から受けていますが、東日本大震災での救護活動の経験を踏まえ、災害時により重要となる通信手段の確保のために、今回は通信指令車をいただきました。

ライオンズクラブから6台目の車両寄贈　奈良県

奈良県赤十字血液センターが4月10日、奈良西ライオンズクラブから献血運搬車を寄贈されました。同クラブからは、昭和63年から5年に一度、献血運搬車や広報車の贈呈を受けており、今回で6台目。毎年4月と8月、近鉄奈良駅前での献血例会の際にはそろいのジャンパー姿のメンバーが、通行人に献血の大切さを呼びかける活動も行っています。こうした協力に対して日赤では今年9月、社長感謝状を贈る予定です。

AREA NEWS

ボランティア交流会開催 体験きっかけに奉仕団入団

大分県

非常時には、「いのちを救う綱」になるかもしれないロープです

大分県支部は4月14日、青年赤十字奉仕団と防災ボランティア「つばさ」が中心となり、赤十字ボランティア交流会を開催しました。

交流会には、赤十字のボランティア以外に、ボランティアに興味がある県内の専門学校生や大学生48人が参加。炊き出し、ロープワークなどの実技を通じて赤十字活動を体験しました。炊き出しでは、水の代わりにウーロン茶で炊飯にトライ。学生の中には不安な顔つきの参加者もいましたが、実際に食べてみると「おいしい！」と一言。ロープワークでは「用途に合わせたさまざまな結び方があって勉強になった。実生活で役立ちそう」という声も聞かれました。交流会終了後、一緒に活動したいという学生4人が青年赤十字奉仕団に入団しました。

点訳奉仕団が表彰 県民功労者団体の部

三重県

点訳奉仕団では、地域の「点訳友の会」を通じて、視覚障がい者への情報提供にも力を入れています

三重県支部点訳奉仕団が平成25年県民功労者表彰を受章。4月13日に三重県総合文化センターで行われた表彰式で表彰されました。

同奉仕団は、視覚障がい者のため、一般図書をはじめ学校教材や新聞記事、市の広報誌などさまざまな点訳を行っています。昭和31年の設立以来、これまでに約4万1000冊、総ページ数500万ページ以上の点訳を行ったほか、県内の防災関係資料や観光パンフレットの点訳も手掛けるなど、視覚障がい者の情報のバリアフリー化に貢献。点字講座の開催や、中途失明者に対する点字の読み書き指導にも力を入れています。今回の表彰は、こうした活動が視覚障がい者の文化・教育・福祉の向上に寄与していると評価されたものです。

海保との災害協定を改定 海の安全確保へ協力強化

神奈川県

横浜海上保安本部の山本保安部長（左）と県支部の近藤晶一事務局長

神奈川県支部は、海上保安庁横浜海上保安部との間で1955年に締結していた災害時の業務協定を3月28日に改定しました。

協定では神奈川県沿岸海域において災害が発生した場合、必要に応じて県内の赤十字病院から医師・看護師らからなる医療救護班を派遣。海上保安本部ではこれら救護班の搬送や救援物資の輸送を行うなど、両者が緊密に協力して救助・救護活動を実施することなどが決められています。今回の改定では、昨年実施した合同訓練を踏まえ、普段から訓練や会議を共同で行うなど平時の連携強化を図ることを盛り込みました。また、災害時の要請手続きを明文化するなど、より円滑な救護活動を実施できるようなものとしました。

おめでとう全員合格！ 姫路看護専門学校で達成

兵庫県

学生らは試験1カ月前に日赤近衛社長の激励を受け、さらに猛勉強

今春、姫路赤十字看護専門学校を卒業した36人全員が3月25日に発表された第102回看護師国家試験に合格しました。

看護師国家試験の合格率はかつて99%を超えた時期もありましたが、ここ10年程は90%前後で推移。今年は受験者数5万6530人に対して、合格者数は5万224人で合格率は88.8%でした。こうした中、同校卒業生の全員合格は6年連続の快挙です。

一方、EPA（経済連携協定）でインドネシアから看護師候補生として来日し、姫路赤十字病院で学んでいたララスワティさんも言葉の壁を乗り越えて見事合格。同院では、平成23年にスワルティ看護師、平成24年にはサルティカ看護師が合格しており、現在も姫路赤十字病院で頑張っています。

まるでおしゃれなカフェ！ にしきた献血ルーム

兵庫県

献血される方が無料で利用できる駐車場も用意されています

若い世代に献血を身近に感じてもらえるよう、カフェのようにくつろげる空間をイメージした「にしきた献血ルーム」が4月6日、阪急西宮北口駅に直結するアクタ西宮西館内にオープンしました。

県内で7カ所目となる同ルームは、待合室だけでなく採血室の内装もカフェのようなデザインで統一。憩いの場となるフリースペースやキッズスペースも設置されていて、若い世代はもちろん、子ども連れで来られる方などにもリラックスしながら献血をいただける工夫が凝らされています。

同ルームでの献血受付時間は10時～13時、14時～17時30分（成分献血の場合は17時まで）となっています。

JRCのリーダー研修会 自主性学んだ高校生

兵庫県

最終日のグループワークでは、3日間で学んだことを発表。習ったばかりの救急法も披露されました

兵庫県高等学校青少年赤十字（JRC）春季リーダーシップ・トレーニング・センターが3月23日から3日間、明石市立少年自然の家で開催されました。

今年は、県内の9校から集ったJRCメンバーのほか、指導者や奉仕団員など40人が参加しました。プログラムには赤十字救急法の基礎講習が組み込まれ、AED（自動体外式除細動器）を使った心肺蘇生や三角巾を使った傷の手当などを実習。フィールドワークでは、奉仕団員が用意したゲームなどに挑戦しました。先生の指示やチャイムなど合図のない生活を通じてメンバーは、自分で時計を見て行動する、周囲に目を向けるなど、社会生活に大切な姿勢についても学びました。

プレゼント

❶森山良子さんのサイン色紙と❷赤十字くまモン・キティピンバッジを各5名様にプレゼントします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールにてご応募ください。

❶　❷

①希望するプレゼント番号
②お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
③郵便番号・ご住所　④電話番号　⑤年齢
⑥赤十字NEWS 6月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑦赤十字NEWSへのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

応募先●郵　送／〒105-8521　東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室　赤十字NEWS 6月号プレゼント係
ＦＡＸ／03-3432-5507
メール／koho@jrc.or.jp（件名「赤十字NEWS 6月号プレゼント係」）

応募締切●6月24日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

中国四川省地震　日赤で救援金を受付中

今年4月20日に中国四川省雅安（があん）市蘆山（ろざん）を襲った地震による被災者の救援活動を支援するため、日本赤十字社では救援金を受け付けています。

皆さまの温かいご協力をよろしくお願いいたします。

日赤から届けられた救援物資を受け取る紅星村の人たち

- ●名　　称　2013年中国四川省地震救援金
- ●受付期間　平成25年**7月23日（火）まで**
- ●受付口座　郵便局・ゆうちょ銀行　00110-2-5606
- ●口座名義　日本赤十字社

※振替用紙の通信欄に「2013年中国四川省地震救援金」と明記してください。受領書をご希望の場合は、通信欄に「受領書希望」と明記のうえ、ご依頼人欄にお名前、ご住所、電話番号をご記載ください。
※窓口でのお振込の場合、手数料はかかりません。
※銀行口座、インターネットでも救援金を受け付けています。
詳しくは日本赤十字社のホームページ（www.jrc.or.jp/）をご覧ください。

WORLD NEWS

シリア

IFRC近衛会長、現地を視察 命がけで活動するボランティア

国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の近衛忠煇会長（日本赤十字社社長）は5月19日から23日の日程でシリアとその周辺国を訪問。武力紛争拡大で深刻な人道危機が続くシリアで同国赤新月社（シリア赤）のアッタール社長と会談したほか、人道支援活動を視察・激励しました。2年以上にわたる紛争で、これまでにシリア赤のスタッフ20人が活動中に命を落とすなど、活動継続が危機にさらされています。

シリア赤新月社のスタッフに歓迎される近衛会長（後列右から4人目）。その左隣がアッタール社長

反政府勢力と政府軍による激しい武力衝突の結果、死者は7万人を超え、425万人に及ぶ国内難民を含め、人口の3分の1にあたる680万人に人道支援が必要とされています。そうした中、シリア赤は、国際赤十字や他のNGO、国連機関などとの連携の下、毎月200万世帯を対象に食料や水、救援物資などを提供。さらに、移動診療所の設置や救急車による負傷者救護活動、こころのケアなどを展開しています。

シリアのダマスカスを5月21日に訪問し、アッタール社長やボランティアらに迎えられた近衛会長は「職員、ボランティアたちはこの過酷な状況にありながら世界に人道の力を見せている」とその活動への称賛と激励の言葉を送りました。

シリア赤をとりまく不安

シリア赤は200人の職員のほか、日々3000人のボランティアが任務に就いています。しかし、スタッフが活動中に襲撃を受ける事態が相次いでいます。5月14日にもシリア赤の制服を着たボランティアの一人が銃撃を受けて死亡しました。これまでに殉職したスタッフは20人。負傷したり、拘束されたりするケースも後を絶ちません。

赤十字・赤新月の標章（マーク）をつけた建物や車、スタッフへの攻撃は国際法で禁止されていますが、これがまったく守られていない状況です。IFRCは、中立の立場で支援活動を行う赤十字（赤新月）の意味を理解してもらえなければ、今後の救援は不可能な状態に陥るとの危惧を表明しています。

日々拡大する人道支援ニーズ

シリア国内の一部の地域では医療サービスも行き届かず、食料品、医療品、せっけんや歯磨きなどの衛生用品も不足する事態が発生。人道支援ニーズが以前にも増して高まっています。

近衛会長との会談でアッタール社長は「過去2年以上にわたり、国際赤十字からシリア赤に寄せられている支援や物資にとても感謝している。しかし、国内の支援ニーズが膨大であることから、シリア赤がこうした要望に応えるためにも、さらなる支援をお願いしたい」と支援の拡大を要請しました。

これに対し近衛会長は「IFRCはシリア赤の活動支援に最善を尽くす。世界の赤十字に呼びかけているシリア支援の予算規模を年度内に約41億円から52億円以上に引きあげる予定」と説明し、今後の継続的な支援を約束しました。

中国

四川省の地震（M7）で大きな被害 日赤から1千万円相当の物資援助

中国の四川省雅安（があん）市蘆山（ろざん）県で4月20日朝、マグニチュード7.0の地震が発生し、死者196人、行方不明者21人、負傷者1万3484人（いずれも5月3日現在）という大きな被害が出ました。19市115県で200万人以上が被災、23万7000人以上が避難を余儀なくされました。

蘆山県は四川省の省都・成都（せいと）から140キロほどの山間部にあり、2008年の大地震（死者・行方不明者約8万7000人）でも大きな被害を受けました。今回も多くの建物やインフラが崩壊、各所で起きたがけ崩れが救援隊の行く手を阻みました。

中国の赤十字社にあたる中国紅十字会は発災後直ちに調査チームを現地に派遣。続けてテントや食料、医薬品、飲料水など大量の救援物資とともに、救援チームを派遣しました。これまで1100人以上のスタッフやボランティアなどによる26の救援チームが現地に入り、救援車両113台をフル活用してさまざまな救援活動を展開しています。救護所は9カ所、水処理施設は2カ所設置されました。

これらの支援により衛生面は改善されつつも、多数の人が今なおテントなどでの避難生活を強いられており、体調不良を訴える被災者も少なくありません。「呼吸器系疾患や皮膚外傷・皮膚炎が多く、長引く避難生活が被災した人々の健康に悪影響を与えている」と医師は語ります。不安や精神的な負担を抱えている被災者も多く、こころのケアのニーズも高まっています。

日本赤十字社は国際赤十字・赤新月社連盟を通じて1000万円相当の物資援助（中華鍋や食器などが入ったキッチンセット2000箱、せっけんやタオルなどの衛生キット1000個）を実施し、蘆山県の中でも特に被害が深刻な龍興（ろんしん）村と紅星（ほんしん）村に住む約2000世帯に届けられました。

赤十字会議 in 広島

「核兵器と人道は両立しない」 核兵器廃絶へ向けて行動計画案策定

核兵器廃絶へ向けて赤十字はどんな役割を果していくのかを話し合う国際会議が5月15日から17日まで広島市で開催され、世界24カ国の赤十字・赤新月社と赤十字国際委員会（ICRC）、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の代表らが参加。各国政府や市民へのさらなる啓発活動に取り組むための行動計画案を策定しました。

11月の代表者会議で最終決定

日本、オーストラリア、オーストリア、カナダ、ノルウェーの5カ国の赤十字社が共催した今回の国際会議は、2011年の国際赤十字・赤新月運動代表者会議で採択された決議「核兵器廃絶に向けた取り組み」を受け継ぎ、より具体的な行動計画について議論を深めるために開かれました。

2011年の決議は赤十字として「核兵器の使用が国際人道法の定める理念と両立しない」「核兵器が使用された場合、その結果に対応できる人道的援助能力が欠如している」との見解を世界に示し、各国政府などから多くの賛同を得ました。今回の会議で示された行動計画案は各国の赤十字・赤新月社に対して、①核兵器についての赤十字の立場をホームページなどに自国の言語で表明し、関連資料を掲載する ②さまざまな媒体を用いて、若者や一般市民に対して啓発活動を行う ③活動の経験、資料、教材を赤十字の社内ネットワークを通じ共有するなどの具体的な提案を含んでいます。

この計画案は、今後188のすべての赤十字・赤新月社で検討されます。今年11月にオーストラリア・シドニーで開催される国際赤十字・赤新月運動代表者会議において最終案を提出し採択を目指します。

赤十字は1946年から核兵器使用の禁止について議論を重ねてきました

今が問題を解決するチャンス

会議に先立ち参加者は広島平和記念資料館を訪問。館内を見学するとともに、被爆者の松島圭次郎さん（84）から体験を聞きました。松島さんは、爆心地から2キロの学校で被爆。被爆直後の市内の悲惨な状況や一週間にわたり下痢やおう吐が止まらなかったことなどを語り、「あの恐ろしい経験をもう二度とどんな国にもしてほしくない」と訴えました。

展示されている「8時15分」で針が止まったままの時計が印象に残ったというアメリカ赤十字社のエリック・シグムンドさんは「失われた時を取り戻すことはできませんが、時計を前に動かすことはできます」。ノルウェー赤十字社のピーター・ハービーさんは「今回の訪問で、核兵器廃絶へのモチベーションが高まった。今が問題を解決するチャンスです」と決意を語りました。